

改めて「クラウド会計」との付き合い方を考えてみる



顧問先の変化と業務効率化で板挟みの会計事務所 スマホ世代が経営者になるとき、会計事務所はどう対応すればよいのか？

「クラウド会計」は当たり前。されど会計事務所の悩みは深し……

全国から会計事務所が最新情報を得ようと集まる「会計事務所博覧会2019」の会場では、あちらこちらに「クラウド会計」の言葉が躍っていた。

「AI」や「RPA」が匂とすれば「クラウド会計」はすでに秋空に浮かぶ見慣れた「雲」になったようだ。

今回の博覧会に「クラウド会計ソフト」を出展している参加企業の多さも、下表からも見て取れる（注：その他のクラウド型会計サービスを除く）。

しかし、「されど会計事務所の悩みは深し……」。ご存知の通り、事務所の現場ではクラウド会計ではWindows版会計ソフトのようにサクサクと仕事が捗ってはいないからである。

そこで、現状と課題を今一度整理してみる意義はありそうだ。同時にその将来性を再認識し、対応方法を考えてみたい。

クラウド会計の現状と課題。導入した後が大変？！

日本の中小零細企業向けのクラウド会計の草分け的存在の一つとして「ネットde会計」（ビジネスオンライン）があった。

サービス開始は2000年であり、画期的であったが、通信速度が今と比較すると格段に遅かった時代でもあり、世に出るのは早かったかも知れない。2013年にfreeeとマネーフォワードがクラウド会計ソフトを掲げて新規参入したことにより、クラウド会計は会計事務所業界に急速にその認知度を高めた。

国内の主なクラウド会計ソフト

「クラウド発展会計」	(日本ビズアップ)
「かんたんクラウド」	(ミロク情報サービス)
「弥生会計オンライン」	(弥生)
「フリーウェイ経理」	(フリーウェイジャパン)
「ツカエル会計(クラウドモード)」	(ビズソフト)
「eco会計」	(KAGホールディングズ)
「MoneyForwardクラウド会計」	(マネーフォワード)
「FX4クラウド」	(TKC)
「ePAPクラウド」	(エッサム)
「Weplat財務応援4クラウドサービス」	(エプソン販売)
「奉行クラウド」	(オービックビジネスコンサルタント)
「JDLIBEX 会計net」	(JDL)
「Web記帳ツールMR1」	(ソリマチ)
「A-SaaS」	(Mikatus:旧エーサース)

それから6年が経過したが、導入した事務所の現場に共通する悩みは、従来の手慣れた会計ソフトと同等の速度で操作できず、結果的に月次・決算業務に時間が掛かってしまっていることである。

何故そうなるのか？クラウド会計ソフトの将来性の話しは後にして、まずは、クラウド会計ソフトの仕組みを整理してみよう。

クラウド会計の仕組みは大きく3つ

一口に「クラウド会計」と言っても、明確な定義があるわけではなく、その違いは技術的な面を多少理解しないと分からないだろう。

現在の各メーカーがクラウド会計ソフトと表現しているものは、やや強引ではあるが、3つのパターンに分類することができるだろう。つまり、①Windows版会計ソフトのデータをそのままクラウドに保存し、使用時にはそのデータをダウンロードして利用する ②データはクラウドに保存しそこで演算処理もするが、利用者はパソコン専用のソフトウェアをインストールして利用する ③データ保存も演算処理もほぼクラウドで行い、利用者はWebブラウザだけ利用する3パターンである。

①は、クラウド会計という用語を広く定義したものであり、操作速度の問題は基本的には生じない。事務所の現場に共通する悩みとは、主に②と③の場合であり、クラウド側にあるサーバーが演算処理を行い、その結果をその都度利用者に送信して画面に表示するため、必然的に処理速度が遅くなってしまっている。5G時代が目前に

迫っているが、通信ソフトが早くなるだけでは解決せず、サーバー側での演算処理能力が重要なファクターになる。サーバー側に投資を重ねれば相応の改善は可能であるが、それでは今の料金体系を維持できない。その一方で、最近のパソコンは高性能となり、手元のパソコンで処理する従来のWindows版会計ソフトのスピードにはとうてい敵わないわけである。このスピードと操作感が会計専門家には許容できない場合が多いというのが問題なのである。

スマホ世代の登場。インストールに違和感

それでも、クラウド会計を各社が目指す理由は、その将来性であろう。金融機関の明細、POSレジ、経費精算などと連携するためにはクラウドが適しているし、AI（人工知能）もクラウドサービスである。そもそも、マネーフォワードやfreeeは、新しい技術で、新しいビジョンの実現を目指して参入したわけであり、①を採用することはあり得ないのである。従来通り処理できない業務上の不便さと、将来性への期待の間で、せめぎ合いが続いているのである。

最近では、スマホしか操作しないパソコンが苦手な若手の経営者が出現しているという話を聞く。パソコンにソフトウェアをインストールすることに違和感のある世代である。彼らが独立して顧問先になる時、会計事務所の論理は通用しなくなるかもしれない。

解決策を提案するメーカー

会計事務所の悩みは、スピードだけではない。マネーフォワードやfreeeは、独立した会計ソフトではなく業務全般との連携を想定したERP的な発想が根底にあるため、画面構成も従来の会計ソフトとの差が大きい。弥生会計オンラインもデータ連携を重視し、Windows版の弥生会計の画面構成や操作性は基本的には継承していない。会計処理を重視する会計事務所にとっては、Windows版との操作性の違いも大きな負担になっているのである。

最近、会計事務所に視点を置いたクラウド会計ソフトがリリースされはじ

めた。「かんたんクラウド」（ミロク情報サービス）は、その名の通り「かんたん入力」画面も用意しているが、会計事務所が慣れ親しんだWindows版の画面構成をほぼそのままクラウドで実現している。

また、「ツカエル会計（クラウドモード）」（ビズソフト：12月から提供開始）は、Windows版とほぼ同じ画面構成と操作性を実現し、Windows版とクラウド会計の間のファイルの受け渡しでデータの同期が取れる仕組みになっている。ビズソフトは元弥生シリーズのエンジニアのスピンアウト企業である。弥生会計オンラインがデータ連携を重視した新しい画面構成と操作性に挑戦したのとは対照的に、ビズソフトがWindows版の画面と操作性をそのまま承継したのは、まさに今、会計事務所の置かれた状況の二面性を映し出しているとも言えるだろう。

操作性を乗り越える職員も出現

「スマホ世代」は、何も顧問先の若手経営者だけではない。会計事務所の中にも、クラウド会計ソフトで従来の業務を処理できる職員が現れはじめたようだ。勿論、厳密な比較はできないが、一定期間、集中して操作を続けることで、操作全般に習熟し、かつデータ連携機能を活用するトータルの作業時間で考えるとほぼ変わらないレベルまで到達したという話も聞く。

現在、顧問先の利用数でもっとも多いと思われる弥生会計も、当初は会計事務所職員の中では操作性に不満もあったが、普及とともにその声は小さくなっていった経緯がある。データ連携が進む中で、クラウド会計がさらに進化して会計事務所に浸透していくことを否定することはできないのではないか。

いずれにせよ、業界全体としては会計ソフトはゆっくり浸透して来た歴史がある。これからも、Windows版とクラウドのせめぎ合いは続くと思われる。会計ソフトをなるべく一本化して効率化を図る基本は変わらないとしても、当面は、いくつもの会計ソフトを使い分けて顧問先の要望に対応する時代が続くのではないだろうか。

(本紙IT取材班)